

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370640

研究課題名(和文) スペイン語の自律学習支援の研究 - 中上級スペイン語教育の指針づくり

研究課題名(英文) Research on autonomous learning support in Spanish - Creating guidelines for middle and high-level Spanish language education

研究代表者

江澤 照美 (EZAWA, Terumi)

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：80305507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間内に、スペイン語の自律学習支援を行うための最重要文献であるセルバンテス協会編纂の『カリキュラムプラン』の研究を進めることができた。特に文化、教育、学習に関わる第10章以降の分析によって、協同学習や学習のふり返しなど従来の語学教育ではあまり実施されていなかった活動を教師が行うための数多くのヒントを得ることができた。また、スペインでの調査の結果、脳科学や心理学の知識を教育に応用したり、ICTを活用した教員養成や学習者のモチベーション維持への試みが近年顕著に見られる傾向であることがわかった。

研究成果の概要(英文)： Within the research period, I was able to proceed with the "curriculum plan" research compiled by the Cervantes Association, which is the most important document for supporting autonomous learning in Spanish. Especially from the analysis of chapter 10 and later related to culture, education and learning, we were able to obtain many tips for teachers to do activities that were not practiced much in traditional language education such as collaborative learning and review of learning.

In addition, as a result of the survey in Spain, it has been found that applying the knowledge of brain science and psychology to education, teacher training using ICT and attempts to maintain motivation of learners tend to be noticeable in recent years.

研究分野：スペイン語教育

キーワード：スペイン語 カリキュラム CEFR

## 1. 研究開始当初の背景

CEFR 策定後、欧州域内の各国は従来の言語教育の見直しを図った。これによりスペイン国内で行われる「外国語としてのスペイン語」教育も様々な影響を受けた。特に顕著な動きとして以下の四点を挙げる。

- (1) セルバンテス協会による新教育参考指導要綱(PCIC)の編纂および出版
- (2) 同協会による語学検定試験制度見直し
- (3) 教材出版社による教材の改訂版や新規出版
- (4) 教育機関によるカリキュラム見直しと共通参照レベルの細分化

とりわけ(1)は CEFR のスペイン語教育への文脈化の象徴である。しかし、日本のスペイン語教育界では一部を除いて CEFR、PCIC のいずれもその内容がまだ十分に理解されていない。また、現在の日本のスペイン語教育は、定住外国人へのコミュニケーション支援のための特殊領域スペイン語教育の教授法や中級以上のスペイン語教授法および学習のための指針が確立されておらず、学習者のレベルに合ったテキストや参考書が充実しているとは言いがたい状況にある。

CEFR 以後のヨーロッパの言語教育事情を近年の研究テーマとしている本研究代表者は、日欧の教育事情や文化習慣の違いを考慮しながら CEFR を日本の外国語教育の中で文脈化することが、上述の日本のスペイン語教育界の問題解決への糸口になるのではないかと考えた。国内でスペイン語の専攻教育を実施する教育機関が数少ないことや、特定領域スペイン語教育やスペイン語教授法研究を行う研究者の数も限られていることから、研究代表者自身が近年取り組んできた研究や活動の規模を拡大し実施するため、本研究計画を立案した。

## 2. 研究の目的

本研究が目指したのはスペイン語学習者が自律的に学習を継続するための中級レベル以上の学習の指針づくりとモデル構築である。日本のスペイン語教育においては、学修時間の少なさのため、学習者の大半が初級レベルにとどまり、中級レベルに達した学習者が学力を伸ばすための教材や具体的な学習の指針が不足している。CEFR や PCIC の研究に関しても日本のスペイン語教育界の取り組みは比較的立ちおけている。

中級以上のスペイン語学習の指針確立および明示化は学習支援教材の開発の促進につながる。また、モデルの構築は教授者が授業シラバスを作成するのに役立つ。特に今回研究代表者が念頭に置いていたのは、特定領域スペイン語教育・学習支援教材の作成に役

立つ指針づくりである。医療、教育、法律、観光、ビジネスなどの特定領域のスペイン語教育は中級もしくは上級レベルに達した学習者向けであるが、日本国内ではまず中上級レベルのスペイン語教育を行う教育機関が非常に限られていて、特定領域分野の言語教育への取り組みも発展途上にある。

以上のことから、現在の日本のスペイン語教育界において先行研究や実践例が必ずしも豊富とは言えない以下の三つのテーマ、

- (1) PCIC の概要研究およびその有効活用
- (2) 中上級レベルの教育の指針づくり
- (3) 成人学習者が自律的に学習を継続できるしくみ

を追求し、研究代表者自身がそれぞれについて今後日本のスペイン語教育において本研究で得た知見を他の研究者と分かち合い、また実際の教育の場で実践するという形で役立てることを本研究の主たる目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、PCIC 自体の文献研究と日本国内およびスペインにおける「外国語としてのスペイン語」教育の実地調査を最初の二年間で実施する計画を立てた。以下、それぞれの意義について述べる。

### (1) PCIC 研究

ヨーロッパ評議会の要請によりセルバンテス協会が CEFR をスペイン語教育の中で文脈化した結果生み出したのが PCIC である。同書は特に教育機関や教師がカリキュラムを作成するための指針となるが、CEFR 同様、その解釈や分析に時間を要する専門書である。研究代表者は研究期間中に本研究と関わりの深い最後の数章についてまとめ、理解を深めることを目標とした。

### (2) 国内調査

日本国内における「外国語としてのスペイン語」教育の実情把握のため、研究開始当初はスペイン語学習者が自律学習に対して持つイメージなどの意識調査実施を予定していた。

他方で、特定領域分野のスペイン語教育の現状について情報収集を行うことにしたが、計画を立てるうちに、スペイン語に限定せず、国内の特定領域外国語教育の実情について理解を深める必要を感じ、文献調査や関連シンポジウムなどへの参加により資料と情報収集を実施する方法をとる方針に変更した。

### (3) スペインにおける調査

研究代表者は、本研究を計画する以前からセルバンテス協会およびスペインの「外国語

としてのスペイン語」教育界の動向研究を実施してきた。CEFR 策定以降のスペインは、1. にて指摘した四つの動きがあり、その後現在に至るまで新しい時代の言語教育および学習のあり方を模索している。

本研究は CEFR 以後著しい変化を経験してきた「外国語としてのスペイン語」教育の動向を追いつつも、日本のスペイン語教育への応用の可能性を探るものである。したがって、研究期間中にスペイン国内の最新の動きを知ることは必要不可欠であり、合計三回スペインにて資料および情報収集と現状把握のためのワークショップ参加などを実施した。参加したのは主として「外国語としてのスペイン語」教育関係の学会やシンポジウム、教材出版社や語学学校主催のイベントなどであり、参加することで最新動向が得られるだけでなく、スペインのほか世界中のスペイン語教師や教育学研究者との意見交換もできるというメリットがある。

以上、(1)から(3)までを最初の二年間で実施したのち、最終年度に研究成果をまとめ、もし計画が順調に遂行できれば自律学習支援用の教材出版を目指すこととした。

#### 4. 研究成果

##### (1) PCIC の存在意義

スペインのセルバンテス協会が 2006 年に刊行した PCIC は先述したようにスペイン語教育における CEFR の文脈化の賜物である。

同協会がそれ以前に刊行していた旧版 PCIC においても文法・語用・談話・語彙の各構成要素のレベル別分類が行われていたが、新版ではそれらの内容や分類記述がより詳細化された。それだけでなく、文化構成要素(第 10 章から第 12 章)と学習構成要素(第 13 章)が新たに加えられた。CEFR では言語使用に関わる人間の能力を「コミュニケーション言語能力」と「一般的能力」に大別しているが、新版の PCIC 所収の文化構成要素と学習構成要素は、CEFR が述べるところの「一般的能力」と連関している。

PCIC において、これらの要素は A1 から C2 までの 6 つの共通参照レベルとは異なる分類基準を適用され、カリキュラム作成の叩き台となる目録リストを参照することにより、同書の利用者がカリキュラムや教育方針を定めるためのツールとして役立つことがわかる。6 つの共通参照レベルで分類される(注:一部例外あり)同書第 9 章までの諸構成要素と第 10 章以降の文化構成要素および学習構成要素の双方を組み合わせることにより、CEFR が目指す自律的かつ行動中心的学習や複言語主義および複文化主義を標榜する学習者の育成を目指すカリキュラム作成が可能になるのである。

以上のような特性を持つ PCIC は、欧州と

は言語教育事情が異なる日本においても、スペイン語教育のためのカリキュラム作成に役立つ。なぜなら、PCIC は CEFR と同様に教条や規範ではなく、オープンで教育機関や学習者の環境に合わせた変化が可能であるためである。PCIC から得られる数多くのヒントから日本のスペイン語教育、あるいは各教育機関、各教室に適した方法や方針が生まれ出されるはずである。

当初の計画では PCIC 研究は最初の二年間を費やす予定であった。しかし、セルバンテス協会主催の PCIC 講座を除いて、PCIC に関する先行研究はスペインでも数少なく、日本のスペイン語教育との関連を論じた先行研究はさらに乏しいのが実情であるため、PCIC 研究は当初の想像以上に進めるのに月日を要し、最終年度まで持ち越すことになった。そして、学習構成要素に関わる最終章「学習手順」については、現実のスペイン語教育に落とし込むための考察が不十分なまま本研究を終えることになった。

しかしながら、本研究で実施した PCIC 分析により、同書が CEFR のスペイン語教育への文脈化の成果物として非常に綿密に構成された出版物であることが明らかとなった。

(本節についての参考文献等として、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕 および〔学会発表〕 を参照)

##### (2) 日本国内の教育動向

本研究の初年度、研究代表者は着手時とほぼ同時期に別の仕事を引き受けることになり、本研究との両立が非常に困難になり、本研究初年度は事実上活動を休止し、実質的に二年目から本研究活動を開始した。

この初年度に生み出した成果のひとつが CEFR に準拠したスペイン語入門レベル(A1.1)の機能シラバスであり、このシラバスの作成過程で、本研究の指針づくりの当初目標として定めていた中上級レベルのうち上級レベルを研究対象から除外することを決めた。CEFR A1.1 レベルのシラバス案作成に要した時間を考慮し、それよりも上のレベルについて研究期間内に研究を終了するのはほぼ不可能であると判断したためである。

研究方法についても計画を変更した点がある。当初の研究計画では自律学習に関する学習者の意識調査を実施する予定であった。しかし、学生の意識調査については本研究でも参考になる優れた先例が複数あることや学習者を自律的な学習に向かわせるための手法と学習レベルとの相関性の乏しさに気づき、国内での調査については当初の方針を変更し、教育関係のシンポジウムやワークショップ参加により日本国内のスペイン語教育の現状を調査した。

また、スペイン語以外の言語教育に関するシンポジウム参加や他の言語教育の専門家との意見交換により、近年の日本の高等教育

機関や個々の教師が抱える問題や取り組みについて数多くの知見を得ることができた。

とりわけ GIDE(スペイン語教育研究会)が 2015 年に『スペイン語学習のめやす』を刊行したことが契機となり、新しいスペイン語教育を追求する試みが継続性を持った活動になった。同書を指針として GIDE が教授法研究と実践活動を開始し、その後 TADESKA(関西スペイン語教授法ワークショップ)も同様の試みを活動の一部として現在に至っている。研究代表者自身も TADESKA でワークショップを担当した。TADESKA はこのようなワークショップ活動の他、日々の教室活動で生じる疑問点という身近な問題から日本の外国語教育の未来まで幅広く教育を語る場にもなっていた。

本研究期間は研究代表者の勤務校が「グローバル人材育成推進事業」推進校として文部科学省からの助成を受けていた時期とほぼ重なっていたため、学内に多言語学習センターが開設され、電子ポートフォリオも利用できるようになるなど、学生の自主的な学びを支援する体制が身近にできたことで、研究代表者が本研究を始める以前から取り組んできたスペイン語多読活動などに利用できるようになった。

他方で、このような自主学習支援制度の整備が学生の学習行動に与えた影響の大きさについては本研究期間内では必ずしも完全に解明できとは言えない。現時点でのまとめとしては、学習環境の整備は必要であるが、少なくとも教育機関で学ぶ学習者にとってより必要なのは教師から適切な時期もしくは間隔で与えられる助言や課題であると考えられる。この問題については、次項(3)に記したワークショップから多くの示唆を得たので、今後の研究課題のひとつとすることを考えている。

(本節についての参考文献等として、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕 および〔学会発表〕 を参照)

### (3) 国外調査から得たもの

本研究期間中に計 3 回、「外国語としてのスペイン語」教育の動向調査を目的としてスペインで開催された学会、シンポジウム、ワークショップに参加し、資料収集や関係者との面談等を実施した。

シンポジウムやワークショップの主な開催主体はセルバンテス協会、大学および語学学校、スペイン語テキスト出版社である。日本のスペイン語教育界では見られない傾向として、テキスト出版社が大学や語学学校との協賛により教育関係のワークショップを開催することである。定期的イベントとして定着しているものもある。

2001 年に CEFR が策定され、2006 年に PCIC が刊行された。外国語としてのスペイン語教育界は短期間のうちにこの動きに対応し、テ

キストの改訂版や新版の出版が相次いだ。

研究代表者が 2008 年に動向調査を実施した時には、CEFR や PCIC を参照したカリキュラムやテキスト、教授法などに個々の教師が対応できるような講座やワークショップが多く開催されていたが、本研究期間中に実施した動向調査では、脳科学や神経科学、心理学から語学教育および学習へのアプローチに高い関心が寄せられていることが判明した。特に Ortiz(2009)や Mora(2013)は、幼少期から青年期に発達を遂げる人間の脳の働きへの理解を深め、記憶力や知覚能力、情感を豊かにする言語教育の必要性を説いている。研究代表者が参加したワークショップではこのような脳科学や神経科学にインスパイアされた提案が散見した。

国外調査でもうひとつ顕著な動きとして認められたのが、協同学習や学習者のモチベーションを高める手段としての ICT の活用である。この動きそれ自体は今や世界中で進行中であるが、スペインの場合はセルバンテス協会あるいはテキスト出版社主導でスペイン語教員養成のための講座やイベントが企画され、その手段としてネットを活用した通信教育やウェビナーが数多く開催されている。

日本のスペイン語教育界においてはセルバンテス協会の日本支部であるセルバンテス文化センター東京がその種の活動を行うこともあるが、開催の頻度はそれほど多くない。研究代表者は 2008 年にスペインのセルバンテス協会主催の教員養成講座のいくつかを同協会施設で受講しているが、近年同協会はこの講座の多くを通信制で実施するスタイルに変更しつつある。また、一部の講座はブレンディッド・ラーニング形式で行われている。

一部のテキスト出版社は ICT を活用した先進的な教育を積極的に打ち出していて、そういう会社が主催する教員養成講座は世界中からアクセス可能でかつ反転授業形式の授業が経験できる。また、学習者の集中力を高める試みとしてゲーミフィケーションの教育への応用研究も進められている。教師、学習者双方のスマートフォンやタブレット所有率が高まるにつれて、今後のスペインの言語教育は IoT との関わりの中でより多くの研究が進められることが予想される。スペインでも、以上のような新しい教育活動を提供できる教育機関はまだ一部に過ぎないが、日本のスペイン語教育と比較すると ICT 活用が進んでいる部分があるのは確かであり、今後もスペインの一部に見られる「外国語としてのスペイン語」教育の先進的動向は注目に値する。

欧州連合の一国としてスペインでもヨーロッパ言語ポートフォリオが教育現場で活用されているが、本研究期間中にスペイン国内の教育機関での電子ポートフォリオ活用の実態についてあまり情報を収集すること

ができなかった。研究代表者の勤務校では「グローバル人材育成推進事業」終了後も電子ポートフォリオを授業や課外教育活動のために継続して活用しているため、本研究終了後も個人的にこの分野については調査をする予定である。

#### (4) 総括

初年度に事実上研究活動ができなかったこと、その間に中上級よりも下の入門レベルのスペイン語教育の指針作成に時間を費やしたことが契機となり、当初の計画の大幅な見直しを図ることとなった。また、PCIC研究に予想していた以上の時間を取られ、本研究は期間中常に遅れている状態であった。結果として、自律学習支援用の教材出版は実現できなかったことを遺憾に思うが、本研究活動により今後の研究への新たな足がかりをつかめたと確信している。

具体的な書物を出せなかったもう一つの理由は、作業量が想定外に膨大で研究代表者単独では期間内に扱いきれず、かつそのことに気づくのが遅かったことにある。この種の研究を共同研究として実施する可能性について今後検討する予定である。

(本節についての参考文献等として、5. 主な発表論文等の〔雑誌論文〕 および〔学会発表〕を参照)

#### < 4. についてその他の引用・参考文献 >

江澤 照美、スペイン ELE 教育事情報告 - 『ヨーロッパ共通参照枠』以後の ELE 教育教材について、ことばの世界、2 号、愛知県立大学高等言語教育研究所、2010、69-76.

江澤 照美、「みんなのスペイン語」キーフレーズ、NHK ラジオテキスト まいにちスペイン語入門編 2014 年 9 月号、NHK 出版、2014、70 - 71.

GIDE(スペイン語教育研究会)、言語運用を重視した参照基準「スペイン語学習のめやす」日本における第二外国語としてのスペイン語教育、GIDE、2015.

Instituto Cervantes, *Plan Curricular del Instituto Cervantes: Niveles de referencia para el español*, 3 tomos, Biblioteca Nueva, 2006.

Mora, Francisco, *Neuroeducación. Solo se puede aprender aquello que se ama*, Alianza Editorial, 2013.

Ortiz, Tomás, *Neurociencia y educación*, Alianza Editorial, 2009.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

江澤 照美、Plan Curricular del Instituto Cervantes の文化構成要素、愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)、査読なし、48 巻、2016、pp.109 - 127. 愛知県立大学学術リポジトリに所収 <https://aichi-pu.repo.nii.ac.jp/>

江澤 照美、(資料) PCIC 第 11 章「社会文化的知識行動」目録の構成一覧、愛知県立大学高等言語教育研究所年報、査読なし、Vol.8、2016、pp.105-117.

江澤 照美、異文化理解のためのスペイン語教育、南山大学地域研究センター共同研究 2015 年度中間報告、査読なし、pp.39-56.

江澤 照美、スペイン語教育指針作成の試み - PCIC 第 10 章「文化的指示対象」の研究と考察 -、愛知県立大学高等言語教育研究所年報、査読なし、Vol.7、2015、pp.81-96.

愛知県立大学学術リポジトリに所収 <https://aichi-pu.repo.nii.ac.jp/>

宮谷 敦美、江澤 照美、高阪 香津美、坂本 ファーン、専攻言語・第 2 外国語における外国語到達目標と Can-do リスト作成に向けて、愛知県立大学高等言語教育研究所年報、査読なし、Vol.7、2015、pp.97-105. 愛知県立大学学術リポジトリに所収 <https://aichi-pu.repo.nii.ac.jp/>

〔学会発表〕(計 8 件)

江澤 照美 GIDE(2015)『スペイン語学習のめやす』を利用して所要時間 20 分の教案を作る テーマ 9 体調と気分、第 100 回 TADESKA(関西スペイン語教授法ワークショップ)、2016 年 7 月 2 日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪市)

江澤 照美 E/LE 教育研究の近年の動向、関西スペイン語学研究会第 393 回例会、2016 年 4 月 23 日、京都産業大学むすびわざ館(京都市)

江澤 照美 異文化理解のためのスペイン語教育(招待講演) 南山大学地域研究センター共同研究「ヨーロッパ言語共通参照枠の現状と今後 - 初修外国語を中心に - 」2015 年 12 月 16 日、南山大学名古屋キャンパス(名古屋市)

江澤 照美 日本の大学におけるスペイン語教育の制度的条件と環境(7) - 新しい時代のスペイン語教師のあり方を考える、第 93 回 TADESKA(関西スペイン語教授法ワークショップ)、2015 年 11 月 7 日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪市)

江澤 照美 日本の大学におけるスペイン

語教育の制度的条件と環境(4) - 制度の変遷、第 90 回 TADESCA(関西スペイン語教授法ワークショップ)、2015 年 7 月 4 日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪市)

江澤 照美 Plan Curricular del Instituto Cervantes の文化構成要素について、関西スペイン語学研究会第 379 回例会、2014 年 12 月 20 日、大学利用施設 UNITY 神戸(神戸市)

宮谷 敦美、江澤 照美、高阪 香津美、坂本 ファーン(共同発表)、専攻言語・第 2 外国語における外国語到達目標と Can-do リスト作成に向けて、2014 年 8 月 7 日、愛知県立大学第 16 回言語教育研究会、愛知県立大学長久手キャンパス(愛知県長久手市)

江澤 照美 日本のスペイン語の中上級教育再考、関西スペイン語学研究会第 364 回例会、2013 年 5 月 26 日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

江澤 照美 (EZAWA, Terumi)  
愛知県立大学・外国語学部・教授  
研究者番号：80305507

以上